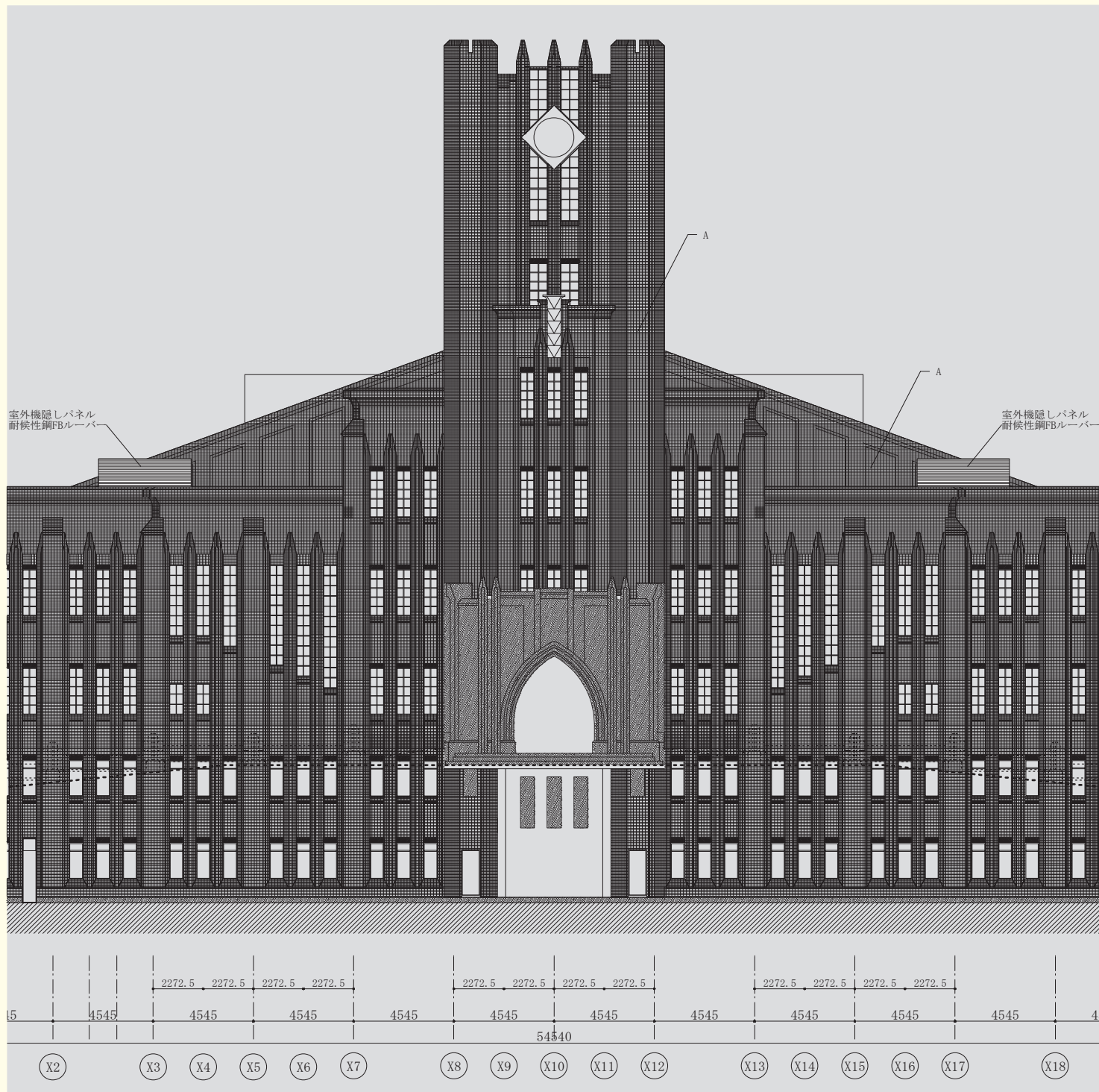


# 学内広報

2015.2.23

no.1464



安田講堂西側立面図



大工事のポイントを徹底紹介!  
安田講堂を全面改修しました

東京大学のシンボル

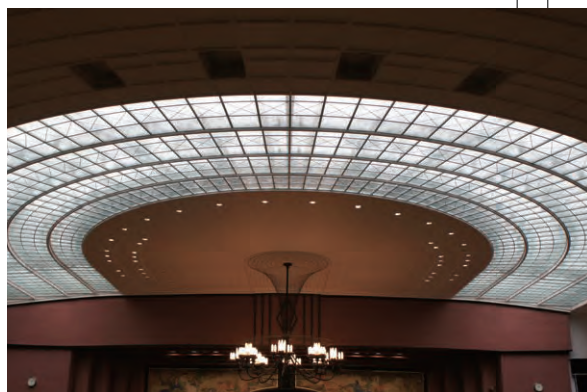
改修ポイントを徹底紹介!

# 安田講堂を 全面改修しました

2013年6月から2014年12月にかけて、安田講堂の全面改修を行いました。今回の工事は、耐震改修に加え、防災機能を強化し、バリアフリー化を進め、創建当初のオリジナル計画案に近い形に全体のプランを修正するというもの。これまでも改修工事は行ってきましたが、今回は1925年の創建以来といえる大がかりな改修でした。歴史と伝統を継承しながら安全性や快適性を増し、より魅力的なシンボルに生まれ変わった安田講堂。その改修ポイントを写真付きで紹介します。

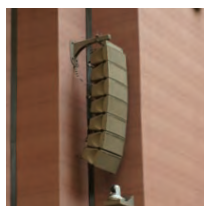
## 震度7でも落ちない天井に

1㎡あたり約100kgの材料を700㎡も使っていた従来の天井は、非常に重く、地震で落ちる心配がありました。今回の改修では、重さが従来の6分の1程度の天井材（GRG）を使い、構造と一体化することで、震度7の地震でも落ちない天井に変身。自然光を通すガラス部分は、単板ダイヤガラスから樹脂フィルムを挟んだ合わせガラスになり、仮に割れても破片が飛び散る可能性は小さくなりました。



## 音響設計を見直し

従来は残響時間の短い講義仕様でしたが、近年の電気音響システムの進化により残響時間をそれほど短くしなくてもスピーチの明瞭性が得られるようになったため、講堂の音響特性を創建時の自然な響きに戻しました。



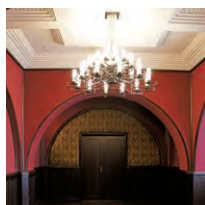
## 講堂の椅子を補修

布地を張り替え、肘掛けと背もたれを補修。隣席と当たってギンギン鳴るといふ問題は、接合部のボルトを増やし、肘掛けを2mmずつ削って解消。25席はキャスターがついて可動式になりました。脚金物の「大」は健在です。



## 椅子の背に銘板を新設

新しい試みとして、講堂の椅子の背に、客席者のお名前を刻印したプレートを取り付けました。座ったときに知っている人の名前を探すというお楽しみも？



## 便殿にも耐震壁

天皇・皇后がいらしゃったときのための休息室（便殿）にも耐震壁が入りました。その関係で、天井がひと周りだけ小さくなっています。

## 総長応接室を復元

講堂2階の総長応接室を創建時の図面をもとに復元。継ぎ目の処理など難度の高い壁紙の仕上げは、日本一とうたわれる職人さんが担当しました。

## 控室にキッチンが登場

大切なお客様が使う控室にはミニキッチンを設置しました。休憩時にお茶を入れてくれることが可能に。

## トイレを増設

安田講堂はトイレが少ない、といわれたのも今は昔。数を増やし、講堂1階（建物3階）には控室専用、2階には来賓専用のトイレもできました。

## エレベーター新設

バリアフリー化のため、正面入口すぐのところに1基を新設。ドアが2つあり、講堂1階（建物3階）では他階と違う側のドアが開く仕組みです。

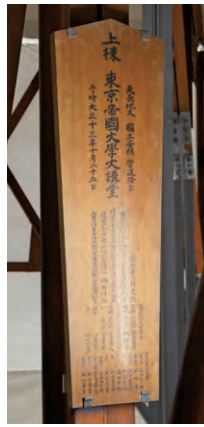
### 小屋組の鉄骨を827本新設

耐震性を増すため、屋根を支える小屋組に827本の鉄骨を新設。後から区別ができるよう、既存のオレンジ色とは違う灰色の鉄骨を使っています。2色が組み合わさる屋根裏は伝統と革新が共存する東大を象徴する!?



### 棟札がもとの位置に

大学の建物らしく「学運隆昌」と記された、天井裏中央の棟札。今回その位置をもとの場所に戻しました。見えないうちでも復元は行われています。



### 防火水槽を地下へ

建物上部を軽量化して耐震性を高めるため、塔屋の屋上にあった防火水槽は地下へ移しました。



### 時計室を塗装

塔時計を管理するための部屋の壁を白くお色直し。創建時は水銀の振り子式でしたが、後にクォーツ発振式となり、今は電波時計を使っています。



### 史料室の場所が空きスペースに

塔屋の上層階にあった大学史史料室(現・文書館)は、建物上部を軽くするため引越しました。

### 屋根からの採光が復活

プロジェクタの性能の関係で便宜的に長い間遮光フィルムが張られていた屋根裏ハイサイドライトに電動カーテンを設置。自然光を取り入れる創建当時の姿に戻しました。

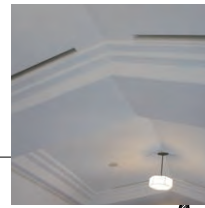


<講堂2階>座席数:408席(固定)  
<講堂1階>座席数:728席(固定703席 可動25席)  
計:1136席\*静音環境改善のためプロジェクター位置を変更。そのため4階で座席数が8席減となりました。



### 4階の通路が復活

従来は部屋があった場所の仕切りを取り除いて通路の形に戻し、ロビーから回廊への回遊性が増しました。

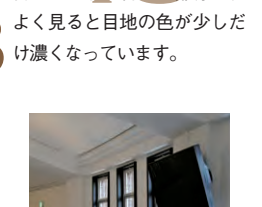
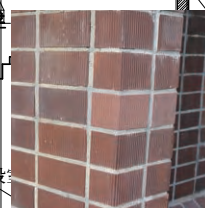


### 回廊に空調を導入

従来は寒かったり暑すぎたりしましたが、今回の改修で空調が入りました。天井を見ると、エアコンの風吹き出し口がついたのがわかります。

### 創建時に近い外壁タイルに

過去の工事では色が均質なタイルが使われましたが、今回は創建当時と同様に焼きむらがあるタイルを製作。破損が目立って取り替えた部分は、よく見ると目地の色が少しだけ濃くなっています。



### モニター位置を変更

回廊の内側の壁に寄附銘板が入ることになり、そこにあったモニターは外側の壁へ。数も増えました。

(次ページにつづく)

### 壁画の修復

舞台上の小杉未醒の壁画「湧泉」と「採果」は、今回も東京藝術大学保存修復油画研究室の手で修復されました(ロビーの壁画は今回修復なし)。



### 窓に電動カーテン

以前はプロジェクターの性能が低いせいもあって遮光された状態のままでしたが、電動カーテンの操作で自然光を取り入れやすくなりました。



### 静音性を強化

従来は旧式のプロジェクターがむき出しで動作音が気になった面が若干ありましたが、機器を新調し、防音箱を設置することで問題を解消しました。



### 耐震壁を多数設置

ロビーで壁が少し飛び出ているのは今回耐震壁が設置された部分。ガラスの奥に白く見えるのが、全部で238箇所設置された耐震壁の1枚です。



# 大講堂の平面図

建物の3・4階は講堂として使用し、1・2階は5月から事務室・会議室として使用することになります。5階は屋根裏フロア、塔屋の内部は時計室・屋上へ至る階段室となっています。

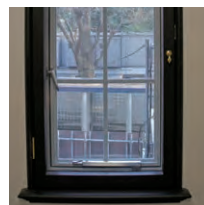
## 1階は事務室に

建物1階は総合企画部の各課や本部学務課が入る事務室に。フロアの随所でアーチ型の意匠が見られます。天井の照明はすべてLED化され、バリアフリー対応のトイレもできました。



## 窓の格子が復活

1階・2階の居室ではアルミサッシを導入、失われていた格子は復活しました（見た目が変わらないようスチール窓枠は従来どおり）。樹脂パッキンと二重窓を採用し、耐震性と保温性と静粛性が向上しました。



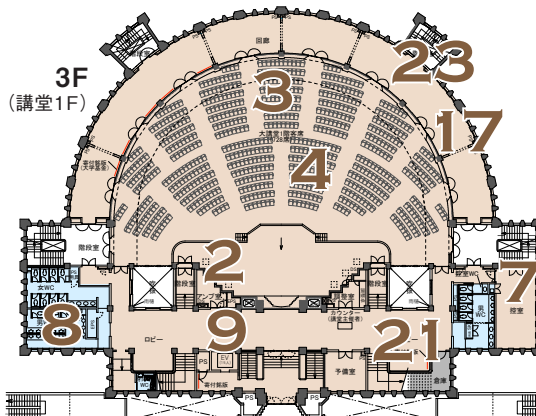
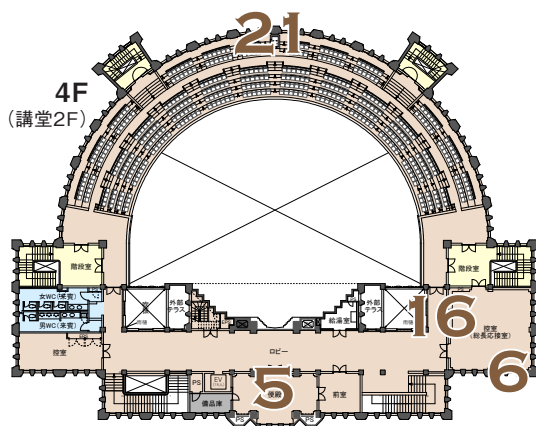
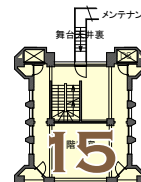
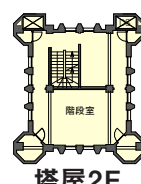
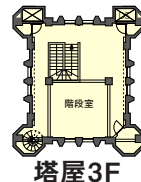
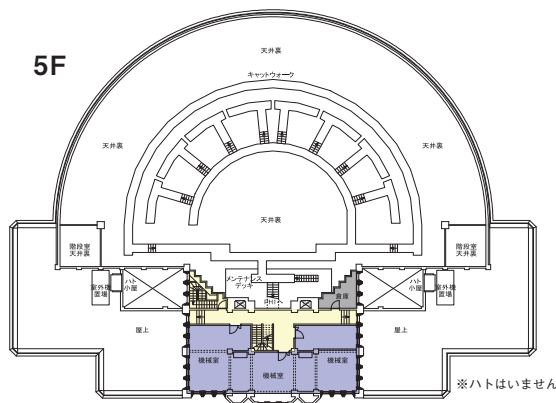
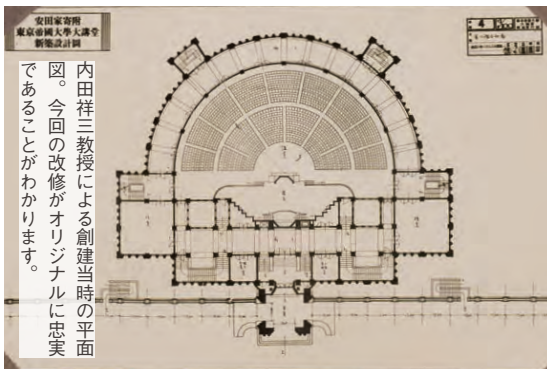
## 窓としての記憶を保存

耐震性を高めるため、窓の数を減らして壁にした場所が多々あります。あえて全てをつぶさずに枠の一部を残し、そこに窓があったことを伝えています。



## 絨毯を移設

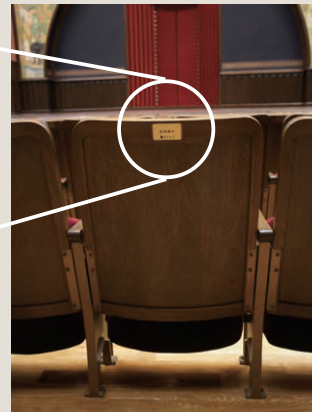
これまで本部棟内に敷かれていた銀杏マークのついたカーベットは、建物2階へ移設しました。大切なものはきちんと大事に次代に継承しています。



あなたの名前を  
安田講堂の椅子に  
残しませんか？

残席わずか！

東京大学基金では、安田講堂改修工事費の不足分（約6億円）について寄附を募集しています。30万円以上の寄附を賜りました方を対象に、お名前を刻印したプレートが講堂1階の椅子に取り付ける特典を用意しています。限定675席で、2月6日現在、残席数は119。つまり、いまが最後のチャンスです。お早めに問い合わせを。



→東京大学基金事務局  
kikin@adm.u-tokyo.ac.jp

# 監修者に聞きました

実は学生時代にも改修案をつくったことがありました

2011年の東日本大震災後、建設時期に近い九段会館の天井が落ちて被害が出た影響で、安田講堂も詳細な調査を行ないました。調査の結果、やはり同様の懸念は拭えず、改修が決定。キャンパス計画室での議論を受けて私が監修を務めることになりました。東大のシンボルに手を入れるわけで、中途半端な形では関われぬ、と気が引き締まりましたね。

私の学生時代、安田講堂は大学紛争後の封鎖状態が続いており、健康診断で1・2階には入れても、講堂には入れませんでした。当時、私は香山(壽夫)研究室の学生。先生がキャンパス計画で安田講堂を何とかしようと言い出し、私が改修案をつくったんです。一つは現代的な材料で増築してギャラリーを加える案。もう一つは、裏の広場を全体的に見直し、地下に博物館もつくる案。どちらも学生に開かれた場所という意図でした。なかなか入れなかったから単純に入りたかったのかな(笑)。案は実現しませんでした。時を経て改修を担うことになり、不思議な縁を感じます。

耐震強化の要点は、構造をどうするかと、漆喰で仕上げた重い天井をどうするか。構造と天井に手を入れるのは大がかりな作業ですから、これを機に全体も見直しました。過去に何度も改修があり、創建時の姿から変わった部分が多かったので、それらを元に戻しながら改修する方針を決めました。古い建物を改修する際、現代的な機能に合わせるために素材を置き換えないといけない場合が出てきます。当然工法も異なる。それでもオリジナルへの復元と言えるのか。何を保存し何を替えるのか。その見極めに相当議論を重ねました。

たとえば、天井材を漆喰を塗ったラスモルタルから軽いGRG(繊維強化石膏)に置き換えました。また、いつしか遮光フィルムを貼って自然光が入らなくなっていた屋根の採光窓を見直し、天井のガラスもつくり直し



キャンパス計画室  
工学系研究科教授

## 千葉 学

ました。サッシは、創建時は鉄の格子が入っていましたが、ある時期に格子の部分を取り去られていました。それを今回、格子を入れて復元しましたが、材料はアルミに変えています。あとは、講堂の回廊。耐震性を増すためにスチールの耐震壁を入れたので、もとの空間とは少し違う印象がするかもしれません。

## 舞台袖にある縦長採光窓には講堂で一番美しいサッシあり

細かい点でいうと、当初の改修案では舞台袖の採光窓に耐震壁を入れる設計でしたが、採光窓の機能が保てないので、耐震壁の位置を変更しました。従来はずっとカーテンで隠れていましたが、これは実は安田講堂で一番きれいなサッシです。中庭からきれいに光が入るようになったのでぜひ確かめてください。

工事が終わってみると、「どこを直したんだっけ?」と感じたくらい、元の姿に近くなったと思います。私だけでなく、多くの先生や施設部、設計事務所、現場の皆さんが総力をあげた成果です。今回は、歴史を繕きながら進めるプロジェクトで、過去の時間と対話を続けた実感がありました。そういう背景も含めて味わってもらえたらと思います。いい建築というのは、時代時代の知恵や技術がいろいろな形で現れるものですが、安田講堂ではそれらが随所に見つけられるはず。これを機にあちこち細部まで見てほしいと思います。

個人的には、改良の余地がある裏の広場もいずれはきれいにしたいです。講堂はシンボリックな存在として、裏手は学生が日常的に利用する場所にしたいな、と。……気づけば学生時代と同じことを考えていましたね。

# 工事長にも聞きました

今回の改修工事は、歴史的検証を踏まえ、安田講堂はどうあるべきかの議論を重ね、充分な検討と工夫改善を経て施工しております。構造躯体や既存漆喰天井の耐震化において、大正14年の創建時に職人が創り上げた手のぬくもりを新しい工法でいかに復元するのか、難しい工事でしたが、弊社社員はもとより、作業員一人一人が創建時に思いを馳せ、現場一丸となって取り組みました。238箇所もの耐震補強壁を設けましたが、そのためにほとんどの内装材を一時撤去し、再設置しました。既存仕上げ材をいかに損傷を与えず取り外すか、石や木の取り付け状況を確認し、先人の技術に感嘆しながら施工しました。結果、改修工事着手前と比較しても遜色なく完成を迎えられたと思います。安田講堂の文化的価値を継承し、恒久にご利用いただくことを祈念しております。

(清水建設株式会社 東京大学安田講堂改修工事作業所 工事長 尾形晃弘さん)



↑天井の現物モックアップの下で微笑む尾形工事長(前列中央)と、作業所の皆さん。



↑従来使われていたモルタルの天井材(左)と今回の改修で使われたGRGの天井材を持ち比べると、差は歴然。講堂の屋根は従来の7分の1〜6分の1まで軽量化されました。

# ひょうたん島通信

大槌発! 第24回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



震災後4年間を振り返って ～復興のためにこれから何ができるのか～

## 白井 厚太郎

大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター助教

2014年9月13日、城山公園体育館から。

もうすぐ東日本大震災から4年が経ちます。震災後定期的で大槌に通ってみて私の受けた印象や考えた事などを含めながら、これまでの復興の様子を振り返りつつ、今後どのようにしてゆくのかを考えてみたいと思います。

震災後に初めて大槌に行ったのは2011年4月でした。まだ町じゅうが瓦礫だらけの混乱状態で、私が知っていた大槌は見るともなにも、本当に衝撃的でした。その後一年くらいの間は、瓦礫が急ピッチで撤去されていき、町の復興が近づいているような気がしていました。しかし、2012年を過ぎた頃から瓦礫の撤去が一段落すると、町の変化は停滞するようになり、町の復興の方針がなかなか決まらないため工事などが進められなかったのです。空き地に積み上げられた行き場の決まらない瓦礫の山を見る度に気分が沈みました。「町だった場所」は、コンクリートの土台と雑草が生えた空き地ばかりになり、その景色が長い間続きました。震災以前は建物で海は見えませんでしたので、津波が街中まで到達するなど考えた事ありませんでした。しかし震災後、防潮堤や海が街中から見える

ようになり、海からこれほど近かったのだという事に初めて気づかされました。もし私が住んでいたら果たして避難していただろうか?と考えると今でもぞつとします。2013年も町の変化はとて小さく、いつになったら復興するのかともどかしく思っていました。2014年頃になると工事や盛り土が本格的に行われるようになり、徐々に町の様子に変化が見られるようになりました。工事はほとんど活発になってきており、今では行く度に町の景色が変化していています。盛り土が安定するまで1年以上かかるそうなので、建物が建ち新しい町になるまでもうしばらくかかりそうですが、復興に向けてやっと歩み始めたと感じています。復興に向けて動き出したといえども、被災地の生活はまだまだ震災以前の水準には戻っていないという印象です。被災地のために私たちができる事はまだまだ



たくさんあります。震災直後、被災地のために何ができるのだろうと本当に悩みました。ボランティアや寄付など、私がしていた事が大災害の被災地に役に立っていると全く実感できなかったのです。ただ、時間が経ち気持ちが整理されるにつれて、私にできる範囲でやれば良いのだと考えるようになりました。今では大槌の海を研究し発信する事が、私が復興のために一番すべき事だと考え研究をしています。被災地に足を運び、被災地の現状を共有するだけでも被災地のためになるはず。是非みなさんも被災地を訪ねてみてください。

## ぴーちゃん日記

### スピー○ラーニングが欲しい!?

国際沿岸海洋研究センター事務職員の「ぴーちゃん」です。6年前、岩手大学から出向で沿岸センターに着任し、大槌町で3年程過ごすも、震災によりふたたび岩大に異動。2年の時を経て2013年4月から戻ってきました。

沿岸センターを訪れる全国からの共同利用研究者、いやそれどころか、大槌を拠点としているセンターの教員からも聞こえてくる、ある言葉がある。「東北弁を学べる『スピードラーニング(大槌版)』があれば…」前回のひょうたん島通信で某教授が、「大槌湾という宝箱の蓋に手が掛かったように感じている」とおっしゃっていた。大槌湾の恵まれた環境や海洋資源、そして何より船舶職員の方々が長年培ってき

た地元漁師さんとの良好な関係は、研究者にとって正に宝だと思います。研究者の皆さんは地元漁師さんから、様々な経験に裏付けされた豊富な知識を教えてください。これも研究には貴重な宝「金言」。大槌湾という宝箱にはお宝満載です。だがしかし、大槌に就任間もない先生方は、金の言葉を100%理解できていない様子です。宝箱の蓋に手が掛かってはいるが開ける「鍵」を持っていない…。

鍵は言葉の習得。聞き流すだけで東北弁を理解できる「スピードラーニング(大槌版)があれば…。漁師さんたちと色々おしゃべりできるようになりた〜い!」なるほど。それは大槌町に腰を据えて研究や生活をしていただくしかあるまい。そのためにも新研究棟建設に力を入れねば!と思う反面、教材を自作すれば売り付けられる、これは金になるお宝だ(笑)とも思った、ある日の午後でした。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

# ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第22回

**泉 泰行** 渉外・基金課 一般職員

## ききんのき座談会(後編)!! ～愛校心と寄附～

座談会後編をお届けします。テーマは「愛校心と寄附」です。※ABCは各立場をまとめたもの(下図)

**B**「そもそも東大の卒業生は愛校心をどの程度持っているんだろう? 東大生は群れないイメージが強いけど」

**C**「確かに寄附をするかどうかはその人の愛校心に依る部分が大きいですから。愛校心に関して渉外活動をしていてどういう意見を聞きますか?」

**A**「東大に対してあまり愛校心はない、と答える人が多いけど、詳しく話を聞いてみると学部・学科の同窓会や運動部のOBOG会には頻繁に出席していたりするね。クラスや部活などの単位でみれば愛着はあるし、思いも強いと思うけど、東京大学そのものに対しては愛校心が薄いというのが現実だと思う」

——愛校心を寄附につなげるには

**B**「卒業生からの寄附でうまくいっているケースは卒業生自身が主体となって寄附集めをしているね。例えば一橋大学では卒業生組織である如水会が主体となり学年別幹事を通じて寄附を呼びかけるなどしている。他にも卒業生組織が強いといえば慶應義塾大学の三田会が有名だね。どちらも卒業生同士のつながりが密だから寄附にも積極的なんだろう」

**C**「なるほど。まずは卒業生同士のつながりを深めることが重要なんですね。東大もついに全ての都道府県で地域同窓会が立ち上がって卒業後も様々なコミュニティがありますから、そういったコミュニティに所属し活動していく中で自発的に母校としての東大全体を支援しようという動きが出てくれれば心強いですね」

**A**「そのためには東京大学が卒業生と継続的にコミュニケーションをとって信頼関係を築いていく必要があるんだろうね」

**A** 卒業生や法人を訪問し寄附の依頼を行っている。最近異動してきた人から3年以上在籍している人まで様々。

**B** 法人を担当し渉外活動を行っている。営業経験を買われて来たものの想像以上に難しいなと思いつつ、逆にそこにやりがいを感じ日々奮闘している。

**C** 寄附プロジェクトの企画や入金管理、領収書発行、銘板の管理などを担当。寄附をいただいた後も意外とやることは多いです。

今回は最終回! テーマは「東大基金のこれから」です。

東京大学基金事務局 安田講堂改修寄附事業に協力を!

TEL 03-5841-1217 E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp  
内線21217 URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

# 留学生さん いらっしやい!

第20回



海を越えて東大に来た学生に聞きました。



★ モロッコ

マリyam・チャビ さん

Mariame Chahbi

工学系研究科建築学専攻  
博士1年

モロッコのラバト出身。母国の大学で日本サークルを立ち上げたほどの日本好き。日本や世界を旅して異文化交流しています。

## Q. どうして日本/東大に来たの?



母国とは異なる文化のアジアに昔から惹かれていました。特にアニメを通して知る日本に関心があり、日本人ペンパルと手紙のやり取りもしていました。そのお蔭で字も上達したんですよ。高校生の時に東大を目指す主人公のアニメを観て、東大に入学しようと決心しました。建築の世界でも東大は有名ですもんね。

## Q. いま学んでいるのはどんなこと?

まず研究生として東大に来て、今年度から博士過程に入学しました(4時間もの製図試験があったんですよ!)。今はスマートシティ、特にエコ交通システム設計の研究をしています。混沌とした東京は、良い所も悪い所も比較できるので、省エネ研究に最適です。将来は未定ですが、研究を続けたいです。



## Q. 日本/東大で好きなところは?



日本の平和で安全なところ、日本人の礼儀正しく親切なところが好きです。夜でも安心して外出できるので、両親も心配していません。異文化に優しいのもいいですね。東大では留学生の友人がたくさんできました。

## Q. モロッコのいいところは?



日本でモロッコが意外に知られているのに驚きました。



モロッコ方言辞書を見つけた時はびっくり。モロッコ料理のお奨めは、クスクスとタジン。写真は家族が作ったクスクスです。

協力: 国際センター本郷オフィス 制作: 本部広報課

## ワタシのオシゴト 第108回

## RELAY COLUMN

教育学研究科・教育学部  
学生支援チーム(教職課程等担当)

遠藤 暢雄

## にぼしと趣味に癒されて



教育の旗のもと。

全学で唯一、教職関係を主な担当とする係です。本学で教員免許を取得する学生は決して多くはありませんが、多忙な本業がありつつも、なお教員免許を取得しようという志の高い学生に関わることができ、また、学内外の教職関係業務に携わる熱心な方々と共に仕事ができるこの業務は、とてもやりがいがあります。

業務においては、さまざまな工夫を凝らして本学の仕組みや学生サービスを向上・効率化することにも注力しています。その結果(担当2年目ということもあり)、最近では予定通りに仕事を終わられます。

早く帰宅したならば、まずは愛猫と戯れます。ふわふわのにぼちゃん(にぼしのにぼちゃん)にもふもふする(専門用語で「モフる」という)と、大変な安らぎを得ることができます。また、最近ではママチャリをロードバイク化することに夢中です。故に不要な自転車があれば引取りますので、お声掛けください!

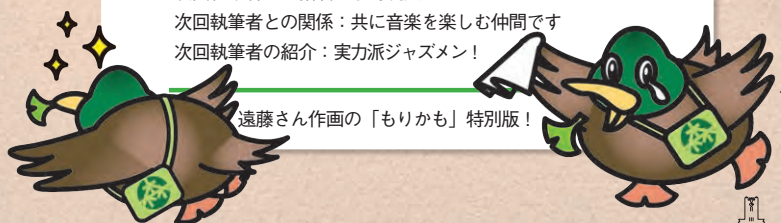
にぼちゃんと趣味に癒されて、毎日オシゴトががんばれます!



にぼちゃん(沖縄出身)と改造チャリと。

得意ワザ: 作画、バンド、実用自転車の改造  
自分の性格: 結構単純直情型なんじゃないかと思います  
次回執筆者のご指名: 小野潤氏  
次回執筆者との関係: 共に音楽を楽しむ仲間です  
次回執筆者の紹介: 実力派ジャズメン!

遠藤さん作画の「もりかも」特別版!



## Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第111回

## 商標ってどんなもの?(その3)

今回は、商品やサービスに「新しい名前」をつけた場合にどうすればよいのか?について、説明したいと思います。

「学内広報」1462号のCrossroadで説明した通り、「商標権」は、特許庁での審査を経て登録された登録商標を、独占排他的に、指定商品や指定役務に使用することができる権利です。つまり、他者の登録商標があるにもかかわらず、知らないで又は無断でその商標を使用すると、商標権を侵害することになってしまうため注意が必要です。

下記の図は、商標権の効力を示しています。商標権の効力は、登録商標と同一の商標を同一の指定商品・指定役務に独占排他的に使用し、他者が無断で使用した場合にそれを排除することができる権利(専用権)と、同一若しくは類似の商標を類似の指定商品・指定役務に、又は類似の商標を同一若しくは類似の指定商品・指定役務に他者が無断で使用した場合にその使用を排除することができる権利(禁止権)とがあり、「新しい名前」は、この商標権の効力の範囲では無断で使用することができません。

そこで、「新しい名前」を付けて商品やサービスの提供をする場合は、他者の商標権がないかを調査する必要があります。その際は、「新しい名前」と、同じ商標、同じ指定商品・指定役務の他者の登録商標があるかを調べるだけでは不十分で、類似の商標、類似の商品・役務についても調べる必要があります。商標の調査は、特許庁が無料で提供しているデータベース(IPDL, 2015/3/23からJ-PlatPat)で行うことができます。

なお、「新しい名前」が他者の商標権を侵害していないことを確かめるために、特許庁に商標出願を行うという方法があります。登録商標となった「新しい名前」は、他者の商標と類似か否かの審査を経て登録されるため、他者の登録商標と類似していないことへの証になります。つまり、登録商標を取得することは、独占排他権を得る以外に、その商標を安心して使用することができるようになる、というメリットもあります。

		商標権の効力 = 専用権 + 禁止権		
		指定商品又は役務		
		同一	類似	非類似
商標	同一	専用権	禁止権	商標権の効力なし
	類似	禁止権	禁止権	商標権の効力なし
	非類似	商標権の効力なし	商標権の効力なし	商標権の効力なし

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>



## インタープリターズ・第91回 バイブル

総合文化研究科・教授 渡邊 雄一郎  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

### かつて肌で感じた インタープリター教育

落ち着いて博士論文をよむために久しぶりに図書室に行った。図書室の匂い——カビ臭かもしれないが——嗅覚はその静寂さとともに研究室に入ったばかりの頃を思い起こさせた。聴覚とも連鎖し、静寂の中に時計の針が進む音が聞こえてきそう。実験の合間——待ち時間に図書室にいくと、科学雑誌が待っていた。世界の人は何を考えているのかを知り、自分の研究テーマはごく限定されたものであってもその位置付けを確認した。本棚の向こうでは、普段教室に立って授業をしている教授が研究者の顔に戻り、文献を開いている。その背中をみて、研究者の姿を感じ取った。本棚には何百、何千冊の製本が並んでいる。一冊ごとに何百人もの研究が詰まっている。過去の研究者から見られている感覚、無言の威圧感を受け、自分もその一角に入れてもらいたいと願い、無言の対話を体験した気がする。論文、著書は生きる人であった。

なにげなく10年引用され続けるような論文を目指す、あるいは一年にxx報の論文を書くといった目標を先輩から語っていただけたこと、銀塩写真の暗室作業を教わる中で研究者としてのあるべき姿を学んだことが思い起こされる。一つの論文、一つの写真にこめる思い、苦勞を知った。論文を構築する前にどれだけのものを用意するか、一枚の写真を撮る際に何をどれだけのものような順番で並べるかを事前に考えておかないといけない。当たり前となるべきことを体験させられた。今ではインターネット、デジカメで必要性が激減したこうした営みの中で、気付かぬうちに無言かつ課外の倫理、危機管理、インタープリター教育を受けた気がする。他人をみて我が身をただし、時間は要したが個々にリテラシー、表現技術を学んだ。授業がないから知らなかった、聞いていなかったといえない雰囲気があった。

今の世代の人はこうした体験、考察を充分にしてくれているだろうか。静寂や無の世界と疎遠になってしまう歩きスマホ、両耳携帯音楽プレイヤーなどで感覚を塞ぎながら時を過ごすのでは、本来感じるべきものに気付かず、同じ物理的時間のなかでも感じ取るものが異なるのではないかと心配になった。

ここで論文を読むための時間を思わぬ思索に耽ってしまったことに気付いた。

科学技術インタープリター養成プログラム  
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

## 救援・復興支援室 より

第45回  
本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

### 救援・復興支援室の活動(2月～3月)

2月4日	第23回救援・復興支援室会議
2月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア
12月～2月	福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア

### ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)

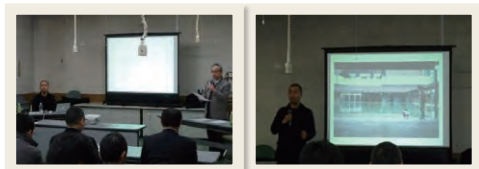


文：佐藤 克憲

1月28日、「東京大学釜石カレッジ」の本年度第3回公開講座を聴講してきました。本学と釜石市は震災以前から社会科学研究所の所内プロジェクト「希望学」に関する調査で交流があり、その縁で平成24年10月に震災後のまちづくり推進や産業等の復興に資する人材育成の場として「東京大学釜石カレッジ」を開設する覚書を締結し、以降現在まで復興・再生をテーマとした連続講座や、地域の学校に対する学習等への指導・助言などを同市と連携して行っているのです。

スタートが18時と、仕事をしている方が業務後に来るには若干早めの時間設定ではあったものの、最終的には32名の参加があり、市民の方々の関心の高さが伺えました。『建築がまちにできること』というテーマで、川添善行准教授が講演を行い、日本および世界各地での活動の事例を紹介しながら、地域ごとに異なる建築形式や材料を見失わないことが重要であることをお話になりました。また、参加者との質疑応答では、震災復興において、建物のデザインの善し悪しよりも人々が安心して住めることが大切であるが、街並みと人々の生業を一体として守っていく「文化的景観」を目指すことが、できる限りよいものを後世に残す後押しになると話していらっしゃいました。「東京大学釜石カレッジ」覚書の有効期間は本年3月までですが、司会の末廣昭教授から、更新の上今後も継続したい旨の発言があり、時間のかかる復興人材育成に取り組む本カレッジの本気度がひしひしと感じられました。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左)司会の末廣社会科学研究所教授による挨拶。

(右)川添生産技術研究所准教授による講演の様子。

[http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html)

Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線 : 21750 (本部企画課)

## トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
1月16日	本部学生支援課	ア式蹴球部、オックスフォード大学と交流戦を行う	12月12日
1月19日	本部学生支援課	東京大学運動会が主将合宿を開催	1月9日～11日
1月21日	生産技術研究所	爽やかな秋晴れの下、千葉実験所公開が開催される	11月14日
1月29日	本部学生支援課	双青戦、念願の総合優勝！	1月24日
1月29日	先端科学技術研究センター	先端科学技術研究センターの本部棟ロビー展示のお知らせ	1月23日～3月31日
1月29日	生産技術研究所	第10回駒場キャンパス技術発表会開催される	10月21日
1月30日	史料編纂所	史料編纂所「共同研究拠点と歴史情報」シンポジウム「史料情報の新たな発信」を開催	1月24日
1月30日	総合文化研究科・教養学部	キャロライン・ケネディ駐日米国大使と学生の対話が駒場キャンパスにて開催されました	1月22日
2月2日	宇宙線研究所	ハイパーカミオカンデ国際共同研究グループが結成されました	1月31日
2月5日	総合文化研究科・教養学部	トライリンガル・プログラム（TLP）修了式が開催されました	1月29日

## お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
1月16日	広報室	東京大学における軍事研究の禁止について	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_3564.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_3564.html</a>
1月21日	本部社会連携推進課	高校生向けプロモーションビデオ「素顔の東大生」ダイジェスト版掲載	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_3594.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_3594.html</a>
2月17日	本部広報課	退職教員の最終講義（3月開催分）	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_3785.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_3785.html</a>

※3月2日以降のURL



## CLOSE UP 千葉実験所公開が開催される

(生産技術研究所)



開発中の四輪駆動車。乗り心地はどうか？



海洋工学水槽での団体見学。波がまたー！

11月14日（金）、生産技術研究所の附属施設である千葉実験所において、毎年恒例の公開行事が開催されました。千葉実験所では、耐震実験設備や水槽施設を用いた大型実験研究や屋外観測、交通・車両工学、建築・土木工学等に関する広い敷地を必要とする研究、バイオ工学、加工成形等の実用化研究などが実施されています。今年の千葉実験所公開も大規模実験施設を中心とした24研究室・研究センターによる一般公開とデモンストレーション、特別企画および自主企画が行われました。当日は非常によい天気、550名を超える来場者をお迎えました。

特別企画では、「産学官連携による航空機製造技術開発」に関する講演会が催され、先進ものづくりシステム連携研究センターの帯川利之教授および同センターの橋本彰特任教授による講演が行われました。また、「準静電界技術」に関する講演会が次世代モビリティ研究センタ

ーおよびモビリティ・フィールドサイエンス社会連携研究部門によって催され、同センターから研究内容が紹介された後、同部門の滝口清昭特任准教授、千葉大学の伊藤公一教授、JR東日本の石塚哲夫様による講演が行われました。

その他、一般公開として多岐にわたるポスター展示が行われ、大型水槽を使用した水中ロボット、構造物の地震応答に関する振動台実験、鉄道駅の最先端ホームドアなど、興味深いデモンストレーションが数多く行われました。千葉実験所公開では、毎年近隣の児童や生徒を対象の見学会を行っており、今年も多くの児童・生徒の皆さんを迎え、見学・体験を通じて社会に役立つ工学研究の最先端に触れていただきました。

本年度の千葉実験所公開に参加した各研究室の研究紹介（千葉実験所公開 ポスターギャラリー2014）は、生産技術研究所のwebから閲覧可能です。<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/>



CLOSE UP

双青戦、念願の総合優勝! (本部学生支援課)



両校は試合を通して友情を深めました。

1月24日(土)、工学部2号館にて、本年度双青戦の閉会式が執り行われました。

双青戦とは、東京大学と京都大学の総合対校戦を指します。本対校戦は、1924年より東京大学と京都大学の各運動部の間で行われてきた交流戦を、2009年度に総合化したものです。

閉会式には、京都大学から、小田滋晃体育会会長が出席されました。また本学からは、長谷川壽一理事・副学長、古田元夫運動会理事長が出席しました。閉会式では総合結果の発表があり、本学は2009年度の総合化以降、初めて総合優勝を果たしました。長谷川理事・副学長は、

両校の熱戦に賛辞をおくるとともに、「本対校戦を良き契機として、スポーツだけではなく学業の面でも、お互いに切磋琢磨してほしい」と述べました。また、本年度実行委員長を務めた中村咲耶さん(医学部3年)は、双青戦が両校の誇りをかけた試合として、今後さらなる盛り上がりを期待したいと述べました。

今年度、本学の運動部は七大学総合体育大会(通称「七大戦」)でも総合優勝に迫る勢いを見せるなど、全体として競技レベルの高さが目立ちました。来年度は本年度を上回る結果を残すよう各運動部はさらなる努力を積んでいます。



CLOSE UP

ケネディ駐日米国大使と学生が対話 (総合文化研究科・教養学部)



学生の質問に丁寧に答えるケネディ大使(左)と、司会を務めた鹿毛利枝子准教授。

キャロライン・ケネディ駐日米国大使と教養学部の学生の対話が、「日米のパートナーシップとグローバルシズンの役割」をテーマとして、1月22日に行われました。会場の数理学部研究科大講義室には、抽選で選ばれた1年生と2年生の学生総勢約150名が詰めかけました。

ケネディ大使は、海外で学ぶことの意義、女性の社会進出への願い、そして日米パートナーシップの重要性をユーモアとともに語り、若者がグローバルシズンとして世界を変えていく輝かしい未来に強い期待を寄せました。

学生パネリスト3人とのセッションでは、文

化的差異を乗り越えた交流の可能性、表現の自由の問題、日本とアメリカの関係、日本の若者がアメリカから学ぶべきことなどについて議論が交わされました。会場の学生との質疑応答では、言語の壁、大使の任務、和食、民主主義、芸術など多岐にわたる質問が飛び出し、大使は一つ一つ丁寧に応じていました。

壇上に飾られて華やぎを添えた胡蝶蘭の花言葉「幸福が飛来する」のとおり、大使は駒場の学生たちに、日米のパートナーシップとグローバルシズンの役割というテーマを通じて、より幸福な社会への道しるべを示しました。



CLOSE UP

ハイパーカミオカンデ国際共同研究グループを結成 (宇宙線研究所)



調印式で握手を交わす梶田隆章宇宙線研究所長(右)。

1月31日(土)に、柏の葉カンファレンスセンターにて、ハイパーカミオカンデ国際共同研究グループ結成記念シンポジウム及び調印式が開催されました。ハイパーカミオカンデ計画は、これまで日本で培われてきた高度なニュートリノ実験技術をもとにスーパーカミオカンデの約25倍スケールのニュートリノ検出器を新たに建設し、J-PARCの大強度ニュートリノビームと組み合わせることにより、「素粒子の統一理論」および「宇宙における物質の起源と進化の

謎」に挑戦するものです。今回、宇宙線研究所と高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所は、ハイパーカミオカンデ計画の具体化に向けた検討についての協力協定を交わしました。ハイパーカミオカンデ計画を国際的に推進するための共同研究グループ結成を記念したシンポジウムには、13ヶ国の代表者からなる国際代表者委員会や国際運営委員会を含むハイパーカミオカンデ国際共同研究グループのメンバー100名以上が出席しました。



CLOSE UP

本部棟ロビーにて先端研の広報展示を開催 (先端科学技術研究センター)



展示の様子。本部棟ではロビーを撮って壁紙にするファンも出現しました。

昆虫ロボット、IT創薬、渋滞、電源、会席料理、逆立ち、投げキス、ユニフォーム……。展示に登場するこれらはすべて、東大の異端児とも言われる先端科学技術研究センター(先端研)の一部です。今回の展示では、西村幸夫所長が掲げるスローガン「Human-centered」をコンセプトに、組織的な特徴や研究の一部をフリーハンドで説明したパネル、研究の10年後や先端研だからできることを手書きフリップと

共に語るムービー、ロボットや太陽電池など人と社会に関係する研究成果を紹介しています。先端研は、材料、環境・エネルギー、情報、生物医化学、バリアフリー、社会科学の計6カテゴリーを持つ東大唯一の文理融合研究所で、組織名称に特定の研究分野は入っていません。「先端」とは常に固定されているものではないからです。先端研が考える「先端」とは何か。この機会にぜひご覧ください。





## 大学教員は正しい仕事か

正しい仕事とはなんでしょうか——ふと考えることがあります。

中学生の頃、武者小路実篤に夢中になった時期がありました。実篤は、中途半端な理想主義と極度の愛国思想のためか、ほかの文豪たちよりも一段低く見られがちですが、私は彼の『人生論』を、今でも折にふれて読み返します。確かに綺麗事に色塗られた楽天的な書物かもしれませんが、しかし心に響く言葉が散りばめられていることも、素直に認めざるをえません。

冒頭の問いに対して、同書はこう答えます。「正しい仕事は、つまり自分の健康をそこねない」。

十分条件ではなく、必要条件を指摘する回答でしょう。この回答は一種独特の薫りを放っています。とくに、この『人生論』に触発されて自然科学者という職業を選んだ私にとっては特別な意味を持ちます。

「魂の限界まで取り組む」とは、小保方晴子氏が年末に理研を辞職した際に残した言葉です。実のところ、彼女に限らず研究者は誰しも、精神限界の最前線で体力勝負をしています。手軽に省エネで大発見をなどという淡い期待は到底叶わず、結局は、健康が破綻するギリギリの臨界点で研究に挑むことになります。

加えて大学は教育機関でもあります。学生たちが立派な研究者として巣立つことができ

るための指導も併せて務めます。私に比べれば、学生たちの体力はほぼ無尽蔵です。魂の限界点は高いに違いありません。しかし一方で、その若者特有のエネルギーが、若気の至りへと相転移しないように監視するのをもまた、実にエネルギーを要する作業です。

こうした真剣な毎日が、とんでもなく充実していることは事実です。しかし同時に問い直したくなるのです。科学者とは健康をそこねない正しい仕事なのでしょうか。

実篤は、こう書き継ぎます。「健康は目的ではない、最初の条件だ」。

健康なときは健康であること自体を忘れています。健康が気にかかるのは病んでいるときです。「充実している」とは、すなわち健康であることの証拠でしょう。

科学とは、偉大な人知を受け継ぎ、プラス $\alpha$ して後世に引き継ぐ仕事です。過去から脈々と続く文明史に乗り、未来への橋渡しのために自分自身を消費する未来貢献です。大学教員の仕事は、科学的知見の進歩という点だけでなく、若者の人材育成という点でも未来指向の自己犠牲にほかなりません。その自虐的矛盾が気にかからない限り、科学者とは実に健康的な営みだと言えます。

池谷裕二  
(薬学系研究科)